

【研究報告】

統合実習が看護学生の基本的コミュニケーション・スキルに及ぼす影響 — ENDCOREs を用いたスキル・タイプの検討 —

島村 美香¹、藤本 学²、幸 史子³、小山記代子⁴

【要 旨】

【目的】 A大学看護学科で行われている統合実習が、看護学生の基本的コミュニケーション・スキルに及ぼす影響について明らかにする。それにより、実習指導および看護基礎教育における基本的コミュニケーション・スキル教育に関する知見を得ることを目的とする。【方法】 A大学看護学科の統合実習履修者114名を対象にENDCOREsを用いた調査を実施し、実習前後のデータが揃った60名を研究対象とした。そして、得られたデータから彼らのスキル・タイプを同定した。【結果】 統合実習により全体的に他者受容が向上した。また、スキル・タイプ別には、実習前に受動型、能動型、自制型であった看護学生の自己主張が、実習後に向上する傾向が見られた。スキル・タイプの変化については、受動型の学生は万能型または均整型に、能動型や自制型の学生は均整型に良化した。しかし、均整型の学生の中には反応型に悪化した者もいた。【考察・結論】 A大学で行われている統合実習は、概ね学生の基本的コミュニケーション・スキルに良い影響を及ぼすことが明らかになった。ただし、統合実習を経験したことでスキル・タイプを良化させる学生が大半ではあるが、悪化させる学生も存在することが確認された。悪化を防ぐためには、事前に学生のスキル・タイプを把握しておき、その特徴に応じた予習的指導、および実習中の配慮的指導を行う必要があることが示唆された。

キーワード：基本的コミュニケーション・スキル、看護学生、統合実習、ENDCOREs、スキル・タイプ

【緒言】

本研究はA大学における統合実習の効果を検証するために、実習前後の看護学生の基本的コミュニケーション・スキルの変化について検証を行う。そして、得られた知見に基づき、より効果的な統合実習における学生指導、および看護基礎教育における基本的コミュニケーション・スキルの教育のあり方について考察を行う。

看護におけるコミュニケーション・スキル

看護師は臨床の場において、日々医療スタッフと協働し、患者や家族に対して必要な看護を提供している。質の高い看護を提供するためには、高いコミュニケーション・スキルが求められる¹⁾。そのた

め、看護学領域において、コミュニケーション・スキルに関する研究が積極的に行われている^{2)~4)}。これらの多くは、「患者や家族に対するコミュニケーション」を対象としている^{5)~7)}。しかしながら、看護師にとって、コミュニケーションの対象は患者や家族に限るものではない。中谷ら⁸⁾は、看護におけるコミュニケーション・スキルは、大きく「对患者」と「対医療チーム」に分かれると指摘している。また、従来の看護コミュニケーション・スキルに関する研究では、一般的な「基本的コミュニケーション・スキル」と、看護に関わる「専門的コミュニケーション・スキル」が明確に弁別されていないことが多い^{9)~11)}。これを受け、本研究は看護におけるコミュニケーション・スキルを、対象の違い（对患者、対医療チーム）と、階層性の違い（基本的な

¹九州看護福祉大学, ²立命館大学, ³活水女子大学, ⁴帝京大学

	对患者・家族スキル	対医療チームスキル
看護学の知識や経験に基づく 対人看護スキル	患者・家族の代弁者としての役割を担う 患者・家族にとって優先すべき問題を見つける 患者・家族が他者に気持ちを伝えられるように支援する など	情報共有 治療・ケアの優先順位の決定 チームの業務遂行状況の確認 など
言語・非言語による 直接的相互作用に関するスキル	患者・家族の意見を受け止める 会話の適切な音量・速度・距離で接する イライラしても患者・家族に気づかれないようにする など	体調に気を配る 職場の雰囲気や和ませる チームメンバーの話を傾ける など

※スキル項目例は中谷(2015)スキル尺度の一部より使用

図1. 看護におけるコミュニケーション・スキルの位置づけ

コミュニケーション・スキル、専門的コミュニケーション・スキル)から分類する(図1)。後者の階層性について、基本的コミュニケーション・スキルは、専門的コミュニケーション・スキルの土台に位置付けられる¹²⁾。そのため、看護におけるコミュニケーション・スキル教育では、基本的コミュニケーション・スキルを固めた後に、専門的コミュニケーション・スキルを涵養することが効果的である⁵⁾。Apkerら¹⁾は対医療チームの看護コミュニケーション・スキルの重要性について述べている。その中で、優れたチームワークを発揮するためには、看護基礎教育において基本的コミュニケーション・スキルを培うべきであると指摘している。なぜなら、基本的コミュニケーション・スキルは、他人と良好な関係を構築するために必要なスキルだからである。この対医療チームの看護コミュニケーション・スキルについて、患者を想定した講義や演習は頻繁に行われているが、医療スタッフを対象としたものは限られている。そこで、本研究は、看護基礎教育における対医療チームの基本的コミュニケーション・スキルに着目する。

看護学生の基本的コミュニケーション・スキルは、初年次から一貫して他者を理解する力と受容する力(以下、藤本・大坊¹³⁾に基づき反応系スキル)に優れている反面、表現する力と主張する力(以下、同様に表出系スキル)が低いことが、複数の研究で示されている^{14) 15)}。すなわち、多くの看護学生は、相手の意図を汲み取り、受け入れることはできるものの、自分の考えを相手に正しく伝えることを苦手としている。将来、チーム医療の中で、看護の観点から適切なケアの必要性を主張し、その専門性を発揮するためには、在学中に、高い表出系スキルを獲得しておかねばならない。

看護実習が基本的コミュニケーション・スキルの修得に果たす役割

看護基礎教育では、講義・演習による基礎学習と看護実習(以下、実習)による実践を往還しながら、学生の看護コミュニケーション・スキルを涵養していく⁹⁾。このカリキュラム方針は、特に実習は基本的コミュニケーション・スキルの向上に効果的であり、^{9) 16) 17)}学生の基本的コミュニケーション・スキルは学年を経るごとに向上することが明らかになっている⁹⁾。これらの知見は、病態や看護に関する知識をつけ、健康に問題を抱える人たちの多様なニーズを実習で体感することが、基本的コミュニケーション・スキルの獲得につながっていることを示している。すなわち、実習中に患者とともに過ごすことにより、看護学生は患者を理解したいという思いが高まるということである。そのため、患者の抱く不安に耳を傾けたり、患者の表情や行動から患者の気持ちを察したりするようになる。これらの行為の積み重ねを通して、学生は基本的コミュニケーション・スキルを向上させていくのである。このように、基本的コミュニケーション・スキルの修得において、患者と直接関わることができる実習の果たす役割は大きい。

実習の一つに統合実習がある。近年、看護職には医療の高度化や地域包括ケアの動きなどの多種多様なニーズに対応することが求められている。これを踏まえ、2009年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正により「統合分野」が新設された¹⁸⁾。教育機関によって実習の時期や内容に違いはあるが¹⁹⁾、概ね統合実習の方法は「特定状況下にある患者受け持ち型」、「複数患者受け持ち型」、「チーム協働型」、「日中夜間通し型」、「テーマ探求型」、「管理実習型」に分類される²⁰⁾。その中でも「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」別表3²¹⁾に明記されている「複数患者受け持ち型」が全国的に多い²⁰⁾。

A大学の統合実習（2単位）は、「複数患者受け持ち型」、「チーム協働型」および「管理実習型」の要素を併せ持っている。すなわち、4年次前期に、学生は6つの看護領域から1つを選択して2週間の実習を行う。その中で、看護管理者からの講話やチームリーダーの見学に加え、より高い看護実践能力を養うために複数の患者を受け持つことになる。より実際的な看護実践を通して、チームケアについて学ぶことが、A大学の統合実習の目的である（付録参照）。

これまでの専門領域別の臨地実習（以下、各論の実習）では、患者とのコミュニケーションに注目してきた。しかし、統合実習では医療スタッフとのコミュニケーションも必要不可欠である。実習では、看護ケアの優先順位を判断し、患者や看護師と時間を調整しなければならない。そのためには、受け持ち患者の状態を的確に把握するだけでなく、指導の看護師との相談や交渉を積極的に行わなければならない²²⁾ ²³⁾。また、何をどのように伝え、相手に自分の意見や立場を受け入れてもらえるかを常に意識して、看護実践に取り組みねばならない²⁴⁾。その試行錯誤の中で、学生は自らの考えを表現し、相手に受け入れてもらえるように主張するという表出系スキルを向上させていくと考えられる。

ただし、すべての看護学生が問題なく表出系のスキルを向上できるわけではない。すでに述べたとおり、看護学生は反応系スキルが高い傾向にある。彼らの中には、自らの考えをうまく伝えることを苦手とする学生も一定数存在する。表出系スキルが低い状態で実習に臨むと、学生は忙しい看護師に萎縮してしまい、看護チームとの協働は勿論、患者に必要な看護ケアも躊躇してしまう。その結果、実習目標の達成が困難になる²⁵⁾。ここから、実習においてまずく学生は、専門的コミュニケーション・スキルよりも、その基本となるスキル、中でも他の医療者に質問したり、自分の考えを正確に伝えたりする表出系スキルに問題を抱えているのではないかと考えられる。そのため、統合実習の学習成果を上げるためには、医療チームを対象とする表出系スキルの事前教育が重要になる。

スキル・タイプという観点

近年、看護師の基本的コミュニケーション・スキ

ルに関するトレーニングが行われるようになってきた²⁶⁾。それらは参加者全員に画一的なプログラムを提供するのが一般的である。しかし、参加者によって得手不得手は異なる。特定のスキルが高い参加者にとって、そのスキルに関するトレーニングは冗長となる。効果的なトレーニングのためには、苦手なスキルに焦点をあてたトレーニングプログラムが望ましい¹²⁾。藤本ら¹⁵⁾は基本的コミュニケーション・スキルの典型（スキル・タイプ）*¹⁾を特定した上で、調査サンプルによらず対象者のスキル・タイプを判定できる方法を開発している。これを用いることで、実習前に看護学生のスキル・タイプを把握しておけば、彼らのスキル・タイプに応じた効果的な事前・事中指導を行うことができるであろう。これまで、看護学生のスキル・タイプの観点から、実習がコミュニケーション・スキルに及ぼす影響や、指導方法のあり方について検証した研究はない。そこで、本研究は統合実習前後の看護学生のスキル・タイプの変化に注目する。すでに、藤本ら¹⁵⁾は大半の看護学生が、「万能型」、「均整型」、「自制型」、「受動型」のいずれかのスキル・タイプであることを明らかにしている。

本研究の仮説

本研究の仮説は次のとおりである。統合実習においてチーム協働の看護実践を経験すると、学生は他者とのコミュニケーションの重要性に気づき、看護実践において意識してコミュニケーションを行うようになる²⁰⁾。したがって、統合実習は看護学生の基本的コミュニケーション・スキル、特にチームアプローチに必要な表出系スキルを伸ばす教育効果を持つであろう。また、実習は他者との関わりの中で実践的な経験をするため、表出系でも対人的要素の強い自己主張に関するスキルに影響を及ぼすであろう。この仮説は、自己主張の得点が実習後に有意に向上し、「自制型」や「受動型」の学生が、「万能型」や「均整型」に変化する結果を得られた場合に実証される。

ただし、実習が基本的コミュニケーション・スキルに及ぼす影響は、ポジティブなものばかりではないと予測される。近藤ら²³⁾は、複数受け持ち型の統合実習では、学生の中には、看護師の忙しさを目の当たりにして萎縮して消極的態様になってしまう者

がいと報告している。このような看護学生は、基本的コミュニケーション・スキルを低下させ、実習前よりも悪いスキル・タイプになると予測される。

【方法】

調査参加者

A大学の4年次生で2018年度統合実習（2018年7月2日～7月13日）を履修した看護学生114名のうち、研究目的に同意した86名（男性10名、女性76名）が調査に参加した。質問紙の回収数は統合実習前が74名（男性7名、女性67名；回収率86.0%、有効回答率100%）、統合実習後が72名（男性8名、女性64名；回収率83.7%、有効回答率98.6%）であった。そのうち、実習前後でデータが揃った60名（男性5名、女性55名）を分析の対象とした。

調査方法

7月に実施される統合実習前の5月第4週と、統合実習後の7月第3週に調査を実施した。休憩時間に対象となる学生に質問紙を一斉配布し、校内に設置した鍵付きのボックスにて回収した。

倫理的配慮

本研究は第一著者の所属研究機関の倫理審査委員会の承認を得た（承認番号29-022）。調査参加者には文書と口頭で調査の目的や内容を説明するとともに、参加しないことで不利益を受けないことを伝えた。また、実習前後でデータを比較するために、調査用紙に学籍番号の記入を求めたが、個人が特定されないように厳重に注意してデータを管理することを説明した。さらに、研究者が実習の評価に一部関わるが、調査参加の有無や内容が実習科目の成績評価に影響しないことを説明した。同意書は調査用紙に添付し、調査用紙とともに学内に設置した鍵付きのボックスにて回収した。

質問紙

実習の前後において、基本的コミュニケーション・スキルを測定するために、多くの看護学研究で使用されており^{6) 14) 16) 27) -29)}、また、信頼性と妥当性が実証され、実践的活用に向けた概念的検討も行われている³⁰⁾ ENDCOREs¹³⁾を使用した。この尺度

は、6つのスキルにつき4項目、計24項目について、「7：とても得意」から「1：とても苦手」の7件法で回答を求める。測定するスキルは、自分の考えや気持ちをうまく表現する「表現力」、自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する「自己主張」、相手の伝えたい考えや気持ちを正しく読み取る「解読力」、相手を尊重して相手の意見や立場を理解する「他者受容」、自分の感情や行動をうまくコントロールする「自己統制」、周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する「関係調整」の6種類である。これらは「基本スキル」と「対人スキル」の2階層からなり、それらはさらに「表出系」、「反応系」、「管理系」の3系統に分かれる。

分析方法

はじめに、統合実習前と後のENDCOREsの尺度得点の平均値の分布について算出した後、実習前後の基本的コミュニケーション・スキルの変化について検討するために、統合実習の前後のENDCOREsの尺度得点の平均値について対応のある t 検定を行った。次に、藤本ら¹⁵⁾のスキル・タイプ判定法^{*2)}にしたがい、対象者の実習前後のスキル・タイプを特定し、その変化を分析した。

スキル・タイプ判定法は、ENDCOREsのスキル得点から、最も近似した特徴を持つ9つのスキル・タイプに対象者を分類する方法である。具体的には、対象者のスキル得点と、ENDCOREsの大規模データをクラスタ分析することで抽出された各タイプのスキル得点との間のユークリッド距離を求め、最小値を示したものを個人のスキル・タイプとする。

【結果】

スキル得点の変化

実習前後のENDCOREsの各スキル尺度得点について t 検定を行った。その結果、他者受容に5%水準で有意差がみられ($t(59)=2.036, p<.05$)、統合実習の前(5.54)より後(5.69)の方が高かった(表1)。

スキル・タイプの変化

統合実習前後のスキル・タイプを特定した結果、

表1. ENDCOREs スキル尺度得点の平均値の比較

	自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容	関係調整
実習前	4.96(0.78)	4.26(0.94)	5.06(0.85)	4.05(0.98)	5.54(0.76)	5.19(0.76)
実習後	5.05(0.79)	4.40(1.06)	5.21(0.89)	4.22(1.06)	5.69(0.73)	5.28(0.78)
後-前平均値の差	0.09(0.67)	0.14(0.84)	0.16(0.75)	0.17(0.86)	0.15(0.55)	0.09(0.68)
t値	1.105	1.282	1.613	1.509	2.036*	1.040
p値	0.274	0.205	0.112	0.137	0.046	0.303

注) * $p < .05$, $n = 60$, $M(SD)$, $df = 59$

統合実習前の看護学生のスキル・タイプは、万能型7名(11.7%)、均整型19名(31.7%)、受動型9名(15.0%)、能動型8名(13.3%)、自制型16名(26.7%)、回避型1名(1.7%)であった。一方、統合実習後のスキル・タイプは、万能型8名(13.3%)、均整型27名(45.0%)、受動型5名(8.3%)、能動型5名(8.3%)、自制型14名(23.3%)、回避型1名(1.7%)であった。

統合実習によるスキル・タイプの変化を見ると、60名中26名(43.3%)が、統合実習によってスキル・タイプを変化させていた(表2)。具体的には、実習前に万能型であった7名は、6名が万能型、1名が均整型に、実習前に均整型であった19名は、1名が万能型、12名が均整型、2名が受動型、4名が自制型に、実習前に受動型であった9名は、1名が万能型、4名が均整型、2名が受動型、2名が能動型に、実習前に能動型であった8名は、5名が均整型、3名が能動型に、実習前に自制型であった16名は、5名が均整型、1名が受動型、10名が自制型に、それぞれ実習後に変化していた。

スキル・タイプ別のスキル得点の変化

統合実習前のスキル・タイプ別に、実習前後のENDCOREsの各スキル尺度得点の差についてt検定を行った。その結果、受動型で、表現力と解読力に1%水準で、自己統制に5%水準で有意差がみられ($t(8)=3.543$, $p < .01$ 、 $t(8)=4.406$, $p < .01$ 、 $t(8)=3.108$, $p < .05$)、いずれも実習前(3.47、4.22、4.56)より実習後(4.28、4.86、5.00)の方が高かった。また、自己主張($t(8)=2.137$, $p < .10$)、他者受容($t(8)=2.101$, $p < .10$)、関係調整($t(8)=2.061$, $p < .10$)に有意傾向がみられ、いずれも実習前(4.03、4.94、4.61)より実習後(4.33、5.17、5.06)の方が高かった。

また、能動型でも、自己主張に5%水準で有意差がみられ($t(7)=2.427$, $p < .05$)、実習前(3.69)より実習後(4.47)の方が高かった。また、自己統制($t(7)=1.938$, $p < .10$)に有意傾向が見られ、実習前(4.13)より実習後(4.41)の方が高かった。

さらに自制型でも、自己主張($t(15)=1.828$,

表2. 統合実習前後のスキル・タイプの変化

	統合実習後のスキル・タイプ(人数)									
	万能型	均整型	受動型	能動型	自制型	主体型	回避型	我執型	内閉型	合計
統	6	1	0	0	0	0	0	0	0	7
ス	1	12	2	0	4	0	0	0	0	19
合	1	4	2	2	0	0	0	0	0	9
キ	0	5	0	3	0	0	0	0	0	8
実	0	5	1	0	10	0	0	0	0	16
習	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
・	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
の	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
タ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
イ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
プ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	8	27	5	5	14	0	1	0	0	60

注) 濃い網掛けはスキル・タイプが上位タイプへ変化、下線はスキル・タイプが不変、薄い網掛けはスキル・タイプが下位へ変化

スキル・タイプの優劣は万能>均整>(受動・能動)>(自制・主体)>(回避・我執)>内閉とした

$p<.10$) に有意傾向が見られ、実習前 (3.08) より実習後 (3.48) の方が高かった。

これらに対し、均整型では、自己主張 ($t(18)=-1.973, p<.10$) に有意傾向が見られ、実習前 (4.47) より実習後 (4.11) の方が低かった (表3)。

【考察】

統合実習を経験することで、全体的に他者受容のスキルが向上することが明らかになった。また、実習前のスキル・タイプが受動型、能動型、自制型の学生は、自己主張が上昇する傾向が見られた。これらより、統合実習は学生の基本的コミュニケーション・スキルを向上させるという本研究の仮説は、一定程度実証された。

統合実習が基本的コミュニケーション・スキルに及ぼす影響

全体的な影響 実習前に比べて、実習後の他者受容が全体的に向上していた。看護学生は他の学部の大学生に比べ、反応系スキル (解読力・他者受容)

が高い¹⁵⁾。さらに、看護実践を通して患者を理解する技術を修得すると、患者の立場や考えを配慮する他者受容のスキルが向上するという報告がある³¹⁾。本研究においても、看護学生は各論の実習で修得した患者理解のスキルを統合実習に活かすことで、他者受容のスキルをさらに高めたものと考えられる。この知見は、統合実習は看護学生に患者を理解し尊重する機会を与えることで、学生の反応系スキル (解読力・他者受容) をさらに向上させる教育効果を持つことを示唆している。

スキル・タイプへの影響 スキル・タイプに注目すると、実習前後でスキル・タイプが変化した学生が26名 (43.3%) いた。そのうち17名 (28.3%) は実習後に良好なスキル・タイプに変化していた。実習前のスキル・タイプが最上位の万能型と、次に良い均整型のまま変化がなかった18名 (30%) を高止まりとして加えると58.3%になる。よって、A大学で実施されている統合実習は、多くの学生の基本的コミュニケーション・スキルに良い影響を及ぼすことが明らかになった。

自己主張への影響 スキル・タイプ別に見ると、

表3. 統合実習前のスキル・タイプ別の実習前後のスキル尺度得点の平均値の比較

実習前のタイプ		自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容	関係調整
万能型 $n=7$	実習前	5.71(0.34)	5.82(0.84)	6.25(0.52)	5.75(0.65)	6.07(1.14)	6.11(0.93)
	実習後	5.75(0.87)	5.86(0.63)	6.39(0.61)	5.96(0.62)	6.21(1.18)	5.93(0.97)
	後-前平均値の差	0.04(0.67)	0.04(0.95)	0.14(0.40)	0.21(0.65)	0.14(0.79)	-0.18(0.51)
	t 値	0.141	0.099	0.934	0.869	0.479	-0.918
	p 値	0.892	0.924	0.386	0.418	0.649	0.394
均整型 $n=19$	実習前	5.24(0.56)	4.50(0.93)	5.21(0.86)	4.47(0.57)	5.97(0.58)	5.46(0.65)
	実習後	5.11(0.70)	4.45(0.85)	5.21(0.96)	4.11(0.86)	6.09(0.46)	5.54(0.64)
	後-前平均値の差	-0.13(0.85)	-0.05(0.82)	0.00(1.04)	-0.36(0.81)	0.12(0.60)	0.08(0.83)
	t 値	-0.674	-0.280	0.000	-1.973 †	0.86	0.41
	p 値	0.509	0.783	1.000	0.064	0.403	0.685
受動型 $n=9$	実習前	4.56(0.54)	3.47(0.51)	4.22(0.40)	4.03(0.46)	4.94(0.54)	4.61(0.44)
	実習後	5.00(0.61)	4.28(0.69)	4.86(0.42)	4.33(0.52)	5.17(0.52)	5.06(0.85)
	後-前平均値の差	0.04(0.43)	0.81(0.68)	0.64(0.44)	0.30(0.43)	0.23(0.32)	0.45(0.65)
	t 値	3.108 *	3.543 **	4.406 **	2.137 †	2.101 †	2.061 †
	p 値	0.014	0.008	0.002	0.065	0.069	0.073
能動型 $n=8$	実習前	4.13(0.80)	4.50(0.33)	4.63(0.65)	3.69(0.64)	4.81(0.40)	4.72(0.54)
	実習後	4.41(0.68)	4.70(0.67)	4.91(0.97)	4.47(0.71)	5.06(0.44)	4.94(0.55)
	後-前平均値の差	0.28(0.41)	0.20(0.55)	0.28(0.76)	0.78(0.91)	0.25(0.58)	0.22(0.54)
	t 値	1.938 †	1.007	1.045	2.427 *	1.214	1.142
	p 値	0.094	0.347	0.331	0.046	0.264	0.291
自制型 $n=16$	実習前	5.08(0.60)	3.67(0.58)	5.08(0.53)	3.08(0.39)	5.55(0.43)	5.08(0.55)
	実習後	5.17(0.62)	3.72(1.01)	5.11(0.66)	3.48(0.93)	5.66(0.48)	5.08(0.69)
	後-前平均値の差	0.09(0.63)	0.05(0.92)	0.03(0.55)	0.40(0.89)	0.11(0.54)	0.00(0.62)
	t 値	0.600	0.203	0.229	1.828 †	0.810	0.000
	p 値	0.557	0.842	0.822	0.088	0.430	1.000

注) ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.1$, M(SD)

濃い網掛けは統計上有意もしくは傾向として実習後の平均値が高い、薄い網掛けは傾向として実習後の平均値が低い

実習前に受動型、能動型、自制型の学生は、統合実習によって自己主張をある程度伸ばしていた。これらのタイプのうち、はじめに受動型の学生は、基本的コミュニケーション・スキルが全体的に向上していた。これは、相手を尊重し受け入れるという行動が、自己主張をはじめとする多くのスキルを向上させる手掛かりになることを示している。次に、自制型の学生については、実習前は表出系スキル（表現力・自己主張）が非常に低い反面、管理系スキル（自己統制・関係調整）が高いという特徴を持っている。そのため、これらの学生は管理系スキルを活かして、統合実習中に患者や家族、看護師と良好な関係性を構築することで、自らの意見を相手に伝える経験を積んでいったと考えられる。こうして実習後に上位の均整型に変化した学生は、16名中5名であった。最後に、能動型の学生は、元より表出系スキルが高いことから、自らの強みを活かしてさらに自己主張を向上させたと考えられる。

自己主張というスキルは「自らの意図を相手にしっかりと伝える能力」である。松谷ら³²⁾は、複数受け持ちの統合実習において、学生は看護チームの一員としてケアをするために、自分が行いたいことを明確に伝える重要性を自覚すると指摘している。学生たちは統合実習において看護師との交渉に苦慮しながら、自らの意図を相手に確実に伝える難しさや重要性を認識したであろう。そのため、受動型、能動型、自制型であった学生たちは、各自のスキル・タイプの特徴を活かして、自己主張を向上させたものと考えられる。

以上、A大学の統合実習は全体的に他者受容を上げ、特定のスキル・タイプの学生の自己主張のスキルを向上させた。したがって、看護学生の基本的コミュニケーション・スキルに良好な影響を及ぼすという本研究の仮説は一程度実証されたことになる。

統合実習において注目すべきスキル・タイプ

受動型 最も基本的コミュニケーション・スキルを伸ばしたのは、実習前に受動型であった学生である。彼らのスキル得点はすべてにおいて向上し、スキル・タイプも1名が万能型、4名が均整型と、9名中5名が上位のタイプに変化している。受動型は反応系スキル（解読力・他者受容）と管理系スキル（自己統制・関係調整）の高いタイプである¹⁵⁾。複

数受け持ち型の統合実習では、学生は患者ケアの優先順位や患者の希望、担当看護師の都合などを考慮してスケジュール調整しなければならない。そのため、時には自らの感情をコントロールし、相手との関係を良好に保ちながら、円滑に交渉を進めていくスキルが求められる。受動型の学生は、これらの経験を通して元から強みであった反応系スキルと管理系スキルをさらに伸ばしつつ、自己主張に関するスキルをうまく磨いていったのではないかと考えられる。一般的に看護師や看護学生は表出系スキルが低い¹⁴⁾ ¹⁵⁾、受動型の人が多い。本研究では9名中5名が上位タイプに良化した。受動系を持つ人の表出系スキルを確実に伸ばすためには、反応系スキルや管理系スキルを活かしつつ、自己主張を行っていく事前指導が必要であると考えられる。

能動型 実習前に能動型であった学生は、実習後に自己主張と自己統制の得点を伸ばしていた。また、8人中5人の学生が実習後に均整型に良化していた。均整型への変化は、反応系スキルの向上を意味する。これらのことから、能動型の学生は自らの考えを積極的に発言し、表現力や自己主張のスキルを看護実践に活かし、成功体験を積み重ねたと考えられる。山下ら²⁵⁾は、看護学実習における学習活動の特徴について、「学習や機会を自ら積極的に獲得し学習を進めない限り、実習目標を達成することは困難である」(p.21)と指摘している。すなわち、学生の積極性が実習での学びを左右するということである。特に統合実習では各論の実習以上に主体的な態度が求められる。そのため、学生の積極性が直接実習の効果に影響する。また、彼らは実習前に平均以下であった自己統制の得点を伸ばしている。複数患者受け持ち型の統合実習において、学生は多職種連携やチーム協働を通して医療者がお互いに協力しあうことの重要性を学ぶことから³³⁾、自分の意見を主張するだけでなく、看護チームの一員として周りに合わせるができるようになったと考えられる。藤本らが示すスキル・タイプの布置¹⁵⁾からもわかるとおり、能動型が均整型に変化するためには、反応系のスキルを伸ばす必要がある。統合実習に参加した学生は、全体として他者受容を伸ばしていたが、中でも能動型の学生は、これまで意識していなかった相手の立場や考えを理解し尊重する関わり方を身につけたものと考えられる。以上、統合実習は能動型

の学生にとって基本的コミュニケーション・スキルを大きく向上させるきっかけとなっているのである。

均整型 統合実習は必ずしもスキル・タイプを良化させるわけではない。実習前に均整型であった学生は、実習後に自己主張の得点を低下させている。また、均整型19名のうち、反応系のスキル・タイプに変化した学生が6名いた（受動型2名、自制型4名）。これは表出系スキルの低下を意味する。実習目標の達成のためには、学生自ら学習や看護実践の機会を得なければならない²⁵⁾。しかしながら、看護師が忙しく働いている姿を目のあたりにすると、学生は受動的な姿勢になってしまう²³⁾。複数受け持ち型の統合実習では、ケアの優先順位を考え、時間調整をしなければならない。そのため、看護師との関わりに消極的になると、十分な看護実践の経験を積むことができなくなる。積極的に関わっていく能動型の学生とは異なり、反応系スキルも高い均整型の学生は、必要以上に多忙な看護師に配慮するあまり、彼らとの交渉に対して消極的になっていった恐れがある。実習担当教員は、均整型の学生がこのような状況に陥っていないか常に意識し、必要に応じて配慮的な介入を行う必要がある。

統合実習の学生指導

文部科学省は2017年10月に「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」³⁴⁾を策定した。現在、全国の看護系の学校は、この方針に従い新カリキュラムの検討と移行を進めている。また、厚生労働省は2018年4月に第一回看護基礎教育検討会³⁵⁾を開催し、看護基礎教育の内容と方法について具体的な検討を始め、看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインの見直しを図っている。この中には統合分野の拡充が含まれている。

近年、重度な要介護状態となっても地域で最後まで自分らしい人生を送ることを目指す「地域包括ケアシステム」が推進される一方、社会の急速な高齢化で複数の病態を抱える患者が増加している。このような現状において、複雑な病態や背景をもつ患者が地域の中で生活していくことを、多職種によって支えていく力が医療者に求められている。その一翼を担うのは、看護師である。そのため、多職種の医療者との連携・協働を実践的に学ぶ統合実習をより

充実させていかなければならない。

統合実習における学びの質を高める鍵となるのは、学生の実習前の基本的コミュニケーション・スキルであることが、本研究によって示された。事前に学生のスキル・タイプを判定しておくことにより、学生は自らのコミュニケーション行動の特徴を踏まえて実習に取り組めるであろう。同時に教員もその学生に必要な事前・事中共導を行うことができる。例えば、万能型の学生に対しては、基本的コミュニケーション・スキルに関する予習的な指導に多くの時間を割く必要はない。しかし、表出系スキルの低い反応系の受動型や自制型の学生には、自らの意見を適切に医療スタッフや患者・家族に伝えるアサーション・トレーニングを演習に取り入れるべきである³⁶⁾。一方、反応系スキルの低い能動型の学生に対しては、得意な表出系スキルを活かして積極的に看護師にアプローチするように促すとともに、他者への配慮の必要性に気づかせるように導く必要がある。また、バランスの取れた均整型の学生には、看護師との関わりに消極的になっていないか目を配り、質問しやすい雰囲気を作るなどの支援を行わなければならない。さらに彼らに対しても、アサーション・トレーニングを実施すると良いであろう。それにより、過度に受容的になることなく、積極的にはたらしきかけることができるようになると期待される。以上、事前に、学生各々の基本的コミュニケーション・スキルの特徴に応じた指導を行っておくことにより、チーム医療や多職種との連携など統合実習の学びの質を向上させることができると考えられる。これらの指導の工夫は、看護学生が新人看護師として臨床現場に適応できるレベルの基本的コミュニケーション・スキルの修得を可能にするであろう。

【結論】

A大学で実施している統合実習が基本的コミュニケーション・スキルに及ぼす影響について、学生のスキル・タイプに注目して検討を行った。その結果、以下の知見および示唆が得られた。

1. 統合実習によって、学生の他者受容のスキルが全体的に向上する。
2. 受動型、能動型、自制型の学生は、看護師にとって重要な自己主張のスキルを向上させる。
3. 統合実習の学びの質を高めるには、事前に学生のスキル・タイプを把握し、タイプに応じた予習的な指導や実習中の配慮的指導が必要である。

【本研究の限界と課題】

本研究により、A大学で実施している統合実習は、学生の基本的コミュニケーション・スキルに概ね良好な影響を与えることが明らかになった。ただし、本研究の知見には限界がある。それは、A大学の統合実習は6領域に分かれて行われるため、実習の内容が領域により多少の違いがあるということである。今回は領域別に検証するには、データ数が十分ではなかった。そのため、領域ごとの統合実習の効果については不明である。今後も継続的に調査を続けることで、データの蓄積を進めていきたい。また、本研究の知見はA大学に限定されるものである。統合実習には6つの型があり²⁰⁾、大学によって実習内容が異なることを踏まえ、今後は他大学でも調査を行うことにより、本研究の知見の一般化を図っていきたい。さらに、基礎研究で得られた知見を、事前・事中の指導や統合実習のプログラムの改善につなげていきたい。

【謝辞】

本研究にご協力いただきましたA大学の学生の皆様、そして実習先の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、平成30年度-32年度日本学術振興科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号18K10180、研究代表者：幸史子）の助成を受けました。

付録：A大学の統合実習の目的と方法（2018年度）

【実習目的】

1. 組織の機能を知り他組織・他職種との連携とチームケアの実際を学び看護の役割を理解する
2. チームの中で複数の対象者・家族への看護を実践する
3. 実習における学びを考察し自己の看護観と今後の課題を明確にする

【実習方法】

※成人看護学領域の実習方法の主要部分を抜粋し、一部補足した

1. 1日目（学内日）オリエンテーションを実施する。担当教員より患者情報を収集し、2人の受け持ち患者の看護計画を立案する。
2. 2日目（臨地自習）実習病棟で受け持ち患者の情報収集を行い、看護計画の修正を行う。看護計画に基づいて翌日のタイムスケジュールを作成する（ケアの優先順位を考慮して作成する）。
3. 3日目以降からメンバーシップの実習（担当看護師に指導を受けながら2人の受け持ち患者のケアを学生主体で行う）、リーダー看護師の役割を学ぶリーダーシップ実習、看護師長の役割を学ぶ看護管理者実習を行う。
4. 看護部長の講話を聴講する。
5. 病棟でのチームカンファレンスや回診に参加する。

【引用文献】

- 1) Apker, J., Propp, K. M., Ford, W. S. Z., Hofmeister, N. (2006). Collaboration, Credibility, Compassion, and Coordination: Professional Nurse Communication Skill Sets in Health Care Team Interactions. *Journal of Professional Nursing*, 22 (3), 180-189.
- 2) 伊藤まゆみ, 小玉正博, 藤生英行. 終末期ケア看護師用コミュニケーション・スキル尺度および看護師用対患者関係知覚尺度の開発. *筑波心理学研究*. 2012; 43: 71-82.
- 3) 上野栄一. 看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の開発. *日本看護科学会誌*. 2005; 25: 47-55.
- 4) 荒添美紀. 看護場面における人間関係をつくるためのコミュニケーション・スキル尺度の作成. *日本看護技術研究学会誌*. 2004; 4: 38-45.

- 5) 田中いずみ, 比嘉勇人, 山田恵子. 看護実践能力の属性による比較と勤務年数、首尾一貫感覚及びスピリチュアリティとの関連. 富山大学看護学会誌. 2012; 12 (2): 81-92.
- 6) 杉山由香里, 比嘉勇人, 田中いずみ, 山田恵子. 看護師の援助的コミュニケーションスキルと私的スピリチュアリティおよび共感性の関連. 富山大学看護学会誌. 2015; 15 (1): 17-26.
- 7) 淘江七海子, 堀美紀子, 松村千鶴. 看護学生のコミュニケーション能力に関する研究－入学時と6ヶ月後を比較して－. 香川県立医療短期大学紀要. 2002; 4: 15-22.
- 8) 中谷章子, 井田政則. 看護コミュニケーション尺度作成の試み－看護スタッフおよび患者・家族に対する看護師のコミュニケーション－. 立正大学心理学研究年報. 2015; 6: 53-66.
- 9) 岩脇陽子, 滝下幸栄, 松岡知子. 臨地実習における看護学生のコミュニケーション技術の学年ごとの特徴の変化－3年課程の看護学生を対象として－. 医学教育. 2007; 38 (5): 309-319.
- 10) 村中陽子. 看護教育におけるコミュニケーション・スキル教授モデル開発に関する研究－看護学生のコミュニケーション・スキルの学習経験と認識の実態－. 日本看護学教育学会誌. 2005; 15 (2): 25-37.
- 11) 長田艶子. 成人看護実習におけるコミュニケーション技術－マルチベースラインによる自己評価導入の効果－. 大阪府立大学看護学部紀要. 2006; 12 (1): 49-57.
- 12) 小山記代子, 幸史子, 河野朋美, 藤本学. 日本の原著論文から見た看護コミュニケーション・スキルについての考察と教育の方向性. 帝京大学福岡医療技術学部紀要. 2017; 12: 9-16.
- 13) 藤本学, 大坊郁夫. コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究. 2007; 15 (3): 347-361.
- 14) 阿部智美. 患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解説, 問題解決, 感情」との関連. 日本看護研究学会誌. 2013; 36 (1): 149-156.
- 15) 藤本学, 島村美香, 小山記代子, 河野朋美, 幸史子. 看護学科初年次生の基本的コミュニケーション・スキルの類型論的特徴－ENDCOREsを用いたスキル・タイプの判定法を通して－. 日本看護学教育学会誌. 2019; 28 (3).
- 16) 幸史子, 岩井真弓, 小山紀代子, 野高朋美, 村上江利子, 倉成由美, 前原宏美. 看護学生のコミュニケーション・スキル習得に関する研究. 帝京大学福岡医療技術学部紀要. 2015; 10: 1-10.
- 17) 奈良知子. 看護学生のコミュニケーション技術教育の効果と問題点. 弘前医療福祉大学紀要. 2009; 1 (1): 59-66.
- 18) 山田里津, 横山トヨミ, 荒川真知子, 吉岡謙治. 新・教務必携: 看護学校の運営と管理. 東京, 日本看護学校協議会共済会, 2009: 111-141.
- 19) 大島弓子. 「統合実習」の内容と発展を振り返る. 看護教育. 2018; 59 (9): 780-786.
- 20) 水戸優子. 統合実習で何を“統合”するか－探究をとおして学生が学びを統合するというこ－. 看護教育. 2018; 59 (9): 780-786.
- 21) 厚生労働省. 看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン: https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tc1593&dataType=1 (2019.5.19アクセス)
- 22) 松清由美子, 瀬川睦子, 長田艶子. 総合看護学実習における複数患者受持ちによる実習効果－成人看護学領域における検討－. 奈良看護紀要. 2012; 8: 31-39.
- 23) 近藤恵子, 小林たつ子. 複数受け持ちに関する学生の学びと困難をふまえた統合実習指導の課題. 長野県看護大学紀要. 2017; 19: 33-44.
- 24) 伊藤奈美, 坂根可奈子, 高橋鮎美, 別所史恵, 三島三代子, 平野文子. 本学における総合実習の取り組み. 鳥根県立大学出雲キャンパス紀要. 2013; 8: 125-132.
- 25) 山下暢子, 定廣和香子, 舟島なをみ. 看護学実習における学生行動の概念化. 看護教育学研究. 2003; 12 (1): 15-28.
- 26) 千葉京子. 看護学基礎教育における社会的スキル訓練. ヘルスカウンセリング. 2001; 4 (6): 26-31.
- 27) 桑原まさ子, 石原英子, 内山こずえ, 小島佐知子. A病院看護師のクリニカル・ラダー別にみるコミュニケーション・スキルの比較－コミュニケーション・スキル ENDCOREs を使用し

- てー. 日本看護学会論文集 看護管理. 2016 ; 46 : 29-31.
- 28) 真鍋知香, 當日雅代. 「看護師ヒューマンスキル尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討. 日本看護研究学会誌. 2018 ; 41 (4) : 637-649.
- 29) 松本真由美, 小島悦子, 藤長すが子, 吉田香, 山田敦士, 森口眞衣. 本学看護学科1年次生のコミュニケーション・スキルに関する研究－エゴグラム、日常生活スキル尺度、ENDCOREsによる分析. 日本医療大学紀要. 2016 ; 2 : 12-22.
- 30) 藤本学. コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けたENDCOREモデルの実証的・概念的検討. パーソナリティ研究. 2013 ; 22 (2) : 156-167.
- 31) 河内浩美, 池田かよ子. 看護学生におけるSOC (Sense of Coherence) とコミュニケーション・スキルの実態－実習の経験別による比較－. 新潟青陵学会誌. 2014 ; 7 (1) : 57-62.
- 32) 松谷美和子, 佐居由美, 大久保暢子, 奥裕美, 石本亜希子, 中村綾子, 佐竹澄子, 安ヶ平伸枝, 西野理英, 高井今日子, 寺田麻子, 岩崎寿賀子, 井部俊子. 看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める「総合実習 (チームチャレンジ)」の評価－看護学生と看護師へのフォーカスグループ・インタビューの分析－. 聖路加看護学会誌. 2009 ; 13 (2) : 71-78.
- 33) 下川原久子. 看護学生の実習における学びと指導の指針－統合看護実習から－. 八戸学院短期大学研究紀要. 2015 ; 40 : 29-40.
- 34) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 看護教育モデル・コア・カリキュラム～「学士過程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～. 2017.
- 35) 厚生労働省医政局看護課. 2019年1月30日第7回看護基礎教育検討会議事録. 2019. https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000212876_00005.html (2019.4.15アクセス).
- 36) 上野徳美, 山本義史, 増田真也, 大戸朋子. アサーション・トレーニングがアサーションの向上と自尊感情ならびにバーンアウト緩和に及ぼす効果－新人看護師研修における研修効果を中心に－. 大分大学高等教育開発センター紀要. 2016 ; 8 : 1-16.

注釈

- * 1) スキル・タイプは、表出系スキルと反応系スキルの両系統が高い「万能型」とそれよりやや劣る「均整型」、表出系スキル優勢の「主体型」とそれよりやや平均よりの「能動型」、反応系スキル優勢の「自制型」とそれよりやや平均よりの「受動型」、両系統とも低い「内閉型」、それよりやや能動型寄りの「我執型」、やや受動型寄りの「回避型」に分かれる。
- * 2) スキル・タイプを判定するためのエクセルファイルを次のサイトからダウンロードすることができる。
<https://www.psycommu.net/>